

Ⅳ 高等部の実践

卒業後の生活にいきづくことをめざした学習活動

—MT (Multipurpose Time) を通して—

1. 研究の概要

(1) テーマ設定の理由

本校では平成5年度より「豊かな心と生活をめざして」という研究に取り組んでいるがこれをうけて高等部では昨年からの継続研究である「卒業後の生活にいきづくことをめざした学習活動」を今年度の研究テーマとした。高等部はいわゆる学校教育をうける最後の機会であり 同時に実社会に出るための最後の準備期間という意味合いを持つ 人生にとって極めて大切な3年間であるといえる。したがって表題こそ違え 高等部で何を教えるかということは常に研究の対象であった。

詳細については次の項で述べるが 本校高等部では昭和56年度より Multipurpose Time (通称MT) という 多目的に使える時間を設定し 挑戦学習などを通じて一貫して豊かな生活を育てる研究を行ってきた。さらに 今日的なニーズに応えるべく平成7年度から「ほんもの学習」という指導の形態を取り入れ実践を行ってきた。

今回の研究にあたって改めて「豊かさ」の意味について教師間で考える機会を持った。「豊かさ」から得られる印象を「幸福」「夢」「生きがい」「充実」などの言葉にして語り合い 豊かさのイメージの共通理解を図った。また「豊かさを支えるものはなにか」「指導者自身が豊かな生活を送っているか」など自問自答し 私たちの考える「豊かさ」像への接近を試みた。

その結果 実践への指針となるいくつかの事柄が認められた。例えば主体的・自立的に生きることの重要性 自然・社会・人間とのかかわりの大切さ そのためにも思いを伝える術を持つことの必要性などである。

これらのことからMT とりわけ「ほんもの学習」の重要性が再確認された。

そこで今年度はこの「ほんもの学習」を研究の中心として より多くの実践の機会をもち 生徒が主体的に活動できる学習のあり方、またその方法等について研究を進めていこうと考えた。

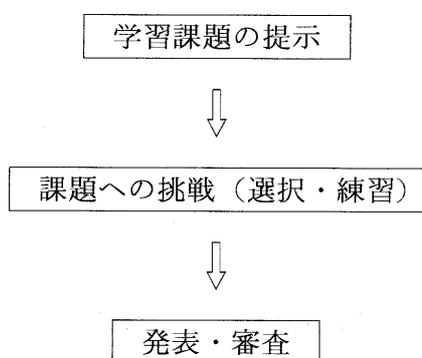
(荒木敏彦)

(2) MTのあゆみ

MTとは Multipurpose Timeの略であり 文字通り多目的に使える時間として昭和56年度から高等部の時間割に取り入れられた。これは 生徒の重度化・多様化 また養護学校の義務制施行という時代の大きな流れの中で 昭和50年代の初めから教育の内容・方法の改善が話し合われる中で生まれてきたものである。それはまた それまでのカリキュラムでは全ての生徒に対する指導が十分にはできなくなってきたということに対する解決策を模索するのでもあった。

出発点は「宿題をもっと出してほしい」という親の要望であった。生徒の実態の変化に伴い 家庭での過ごし方や家庭学習のあり方の見直しが迫られてきたのである。生徒の日常の様子を見たり 将来の生活を考えたりして これまでのような漢字の読み書きや計算のドリルのような机上の学習に限らず 課題とすべきことはいろいろあるのではないかと考えた。そこで話し合いの結果考えだされたのが「挑戦学習」という指導の形態であり 教師の予想をはるかに上回る生徒たちの反応に MTの中心的内容として定着するようになったのである。

この学習を促した背景として集団学習があげられる。本校では昭和53年度から集団学習が研究の内容として取り組まれてきた。その集団学習ではすべての教師 すべての子どもが総ぐるみで活動に参加するという集団指導の形態をとる中で 個に合わせた指導を行ってきた。挑戦学習でもこの総ぐるみの指導体制の特長を生かしながら 個に合わせた指導ができるという点で取り組みやすかったといえる。



図Ⅳ－１

挑戦学習の方法については図Ⅳ－１の通りである。教師が「こんなことができるようになるればいい」あるいは「上手になればいい」と思って提示した課題の中から生徒が「してみたい」「おもしろそう」と思った課題を選択する。そして自分が選んだ課題を一定期間練習した後 全員の前で発表し審査を受ける。この提示と発表・審査が全体の前で行われることが「挑戦学習」の大きな特長であり 教師と生徒が共に緊張感を持って学習に臨み 喜び

やくやしさを共にし かかわり合い認め合う関係を形作っている。また学校週5日制が定着し 自由な時間がますます多くなっている現在 自分の楽しみを見つけ 目的を持った意欲的な生活ができるようにと考え出される課題は「知識に関するもの」「手先(手指)に関するもの」「運動に関するもの」の3つのジャンルに分けられ 百人一首 カラオケ ジグソーパズル ネジ締め けん玉 ラジオ体操 ジルバ 等々 生活に広がりを持たせ 楽しみを持たせるものになっている。

MT＝挑戦学習として10年余り実践を重ねてきたが 自分の楽しみ 生きがいを見つけるために 挑戦学習だけでいいのか 練習・発表という形をとらなくても経験させるべき大切なことがあるのではないかという意見が出されてきた。また 学校だけでなく実際の場所に行って活動することも必要ではないかという声も聞かれるようになってきた。そこで 平成7年度あらたに 将来の生活を考え 今まで学校生活ではあまり経験させることができなかった活動を積極的に取り入れ 校内で設定した模擬的な活動や環境だけでなく実際の場所や施設に行って活動する「ほんもの学習」をMTの内容の一つに加えることとなった。活動の単位は活動しやすいように学級単位とした。具体的な活動をするにあたっては 教師の援助をなるべく少なくし できるだけ生徒自身が自分の判断や自分なりの方法でできるように配慮した。また この学習では成功の見込みのないことにあえて挑戦さ

せるのでなく 成功経験をさせ 成就感を味わわせることで 再び同じような場面に立ったとき 自分で主体的に行動できるようにしたいと考えた。このような位置づけやねらいのもとづき 昨年度は各学級単位で調理（焼きそば フレンチトースト等）・ボウリング・カラオケ・公共施設（玉泉園・歴史博物館等）の利用・喫茶店の利用等の実践を行った。その中で生徒同士が助け合ったり教え合ったりしてかかわりを深めたり 「クラスのみんなど行った。自分でやってみた」という自信が 休み時間や家庭での生活に反映されてきたりしている。このように 一定の成果もみられる反面 問題点も多く見られ 教師にとっては生徒の実態や一人一人の将来の生活における課題を改めて見つめなおす機会となっている。

また 生徒個々の挑戦を基本とする「挑戦学習」 学級単位で経験する「ほんもの学習」に対して 昨年度あらたに学部単位で行う活動を「レクリエーション学習」として位置づけた。これはこれまで本校で「朝の会」や「生活」の時間割に学部全体で行ってきた学習内容を改めてとらえなおし 高等部の生徒全員が共に楽しむこと その中で個々の生徒がその能力に応じてかかわり合うことができることをねらいとして位置づけたものである。その内容としては「フォークダンス」「ウォークベースボール」「エアロビクス体操」「カルタ取り（百人一首）」「ゲーム」などがあげられる。どの活動も集団があってこそ本当の楽しさが味わえるものであり その中で生徒一人一人が仲間を意識し 互いに協力し合うとともに リーダーとしての力を発揮する場も与えられることから 集団としての高まりもみられるようになってきている。また活動そのものがそのまま卒業後の余暇に生かされていることもあり 大切な学習となっている。

「挑戦学習」「ほんもの学習」「レクリエーション学習」はそれぞれのねらい・内容・方法で相互に関係を持っており 学校生活や家庭生活の中で生きた活動になっているように思われる。

（近 藤 明 子）

（3）卒業生の生活と在校生の実態

本校が昭和39年度に全国3番目の附属養護学校として創立されてから既に33年 その間に送り出した卒業生の総数は325名に及ぶ。ところでその卒業生達の生活はどのようなものであろうか。豊かな生活を送っていると言えるのだろうか。この素朴な疑問に対し何らかの答えを求めるために平成7年度に卒業生を対象にアンケート調査を行った。その結果帰宅後や休日の過ごし方として「家で家族と一緒にテレビを見る」という回答が群を抜いて多かった。（詳細は平成7年度の本校研究紀要の資料参照）

より客観的な傾向を知るべく 今年度は追調査として毎年8月に行われている同窓会の場で聞き取り方式でアンケート調査を行った。聞き取り方式にしたのはより正確な回答を得たいと考えたからであるが 時間の関係もあって24名の回答しか得られなかった。そのため卒業生の全体像を正しく浮き彫りにできたとは言いきれないが その結果から考察してみたい。なお設問は以下のとおりである。

- ①家ではどのように過ごしていますか？（5つ挙げて下さい）
- ②休日はどのように過ごしていますか？（5つ挙げて下さい）

- ③仕事以外で毎日続けていることがありますか？
- ④友達と電話したり一緒に遊ぶことがありますか？
- ⑤一番楽しいと感じるのはどんなときですか？
- ⑥今仕事以外でしたいことは何ですか？（理由も含めて）
- ⑦今行きたい所はどこですか？（理由も含めて）
- ⑧在学中の思い出として一番残っているのは何ですか？

各設問の最も多かった回答をみると まず①では“テレビを見る”で23名 ②では買い物をはじめとした“外出”で20名（買い物15 その他5）にのぼった。また③では“特になし”と“トレーニング”という答えで7名 ④では“特になし”で18名 ⑤では仕事や職場での会話 仕事等“職場に関するもの”で10名であった。⑥と⑦では答えが重複する場合が多くあったのでここではまとめて報告するが 一番多かったのは国内外を含めて“旅行”で16名いた。ただその理由については個々まちまちであり 傾向を探るには至らなかった。最後の⑧では“グループ学習（教科の学習）”で9名いた。（調査結果の詳細については巻末の資料を参照されたい）

平成7年度のアンケート調査と今回の調査を重ね合わせて卒業生たちの生活を浮かび上がらせるならば

“仕事を終えて家に帰ってからはテレビを見たり家の仕事を手伝ったりしながら過ごし 休日には家族の人と一緒に買い物に行ったり家でテレビを見たりCDを聞いたりしながら過ごす。自分で決めているトレーニングを続けている人もいるが多くは友達と連絡したり遊んだりすることもなく 会社（作業所）と家を往復している。”

といったところであろうか。これはその評価はともかく 考えてみれば現代の平均的な日本人の生活そのもののようにも思える。それはそれで大きな問題とは言えないかもしれないが 設問の⑥⑦で「分からない」が10名いたこと それに「したい（行きたい）理由」を聞いてみると「した（行った）ことがないから」とか「一人でさせて（行かせて）もらえない」という言葉が聞かれたことが気になった。これは“大丈夫だろうか”といった周りの大人の心配の現れと思えるが この結果として生ずる経験不足を補うためにも在学中にできるだけたくさんのごと（場所）を経験させることの必要性を感じさせられた。また下位の答えではあるが「ゲームセンター」「カラオケ」「デート」という意見が出されており 現代に生きている若者であることを改めて認識させられた。

ところで在校生の実態はどのようなものでしょうか。今年度の高等部の生徒の実態についてここで述べたい。

現在本校高等部に在籍している生徒達（計29名）をIQ別にみると測定不能が2名 30未満が9名 30台が5名 40台が8名 50以上が5名となっている。また併せ持っている障害別にみると自閉傾向が14名 ダウン氏症候群が5名 言語障害をもつものが18名 てんかん等の発作をもつものが3名いる。なお言語障害の中でも言葉のほとんどないものが4名 コミュニケーションをとるのが難しいものが6名いる。ちなみに人のかかわり合いをとるのが難しいものは12～13名ほどいる。

生徒達の余暇の過ごし方であるが 学校の休憩時間の様子を見ると友達と遊び（野球

バドミントン 会話等)に興じているものが9～10名 一人で何か(ジグソーパズル ボール遊び ピアノ けん玉 本読み コンピュータグラフィック等)して遊んでいるものが5～6名いる。ただこの中に分類されながらも問題なのは“休み時間はこれをしなければなりません”というタイプの生徒で これらの生徒にとっては休み時間は本来の休み時間ではなく ○○をする時間と思込んでいるようである。その他にも一人でなんとなく過ごしているものが10～12名いるがこのほとんどが自閉的傾向であり コミュニケーションをとるのが難しい生徒達である。

放課後の様子では 部活動(陸上部)で毎日走っているものが12名 トランポリン教室で週2回楽しく跳んでいるものが6名いる。そして終礼後にすぐに家に帰るものが11名である。この11名の生徒達が家でどのように過ごしているのかについては今回アンケート調査していないので詳細は不明だが 連絡帳等から伺える範囲ではテレビ 母親の手伝い 音楽を聞くなどを行っているようである。

休日の様子について日記などでみると一人で外出したり友達と遊んだりするケースは少なく 家の中でテレビを見たりCDを聞いたり自分なりの決まった活動をしたりお手伝いをしたりして過ごすことがほとんどの方である。また出かけるにしても親(家族)と一緒に バスを選んで乗ったりお金を払ったり受付をすませたりといったことはほとんど親がしているケースが多いようである。

卒業生の生活や在校生の余暇の過ごし方の実態をみてきたが こうしてみると生徒達の知的能力の問題よりむしろ毎日の生活の中の“経験の少なさ”が問題となっているように感じる。障害児はもちろん 健常児にとっても「より多くの経験を積むことが生活を豊かにすることにつながる」と言えるのではないか。学校で何をすべきなのかを真剣に考えなければならぬと言えよう。「できない(だろう)からさせない」のではなく 「やればできるかもしれない」のだから…。

(石井雄史)

2. 研究の方法

昨年度の研究ではMTを構成する3つの指導の形態「挑戦学習」「レクリエーション学習」「ほんもの学習」について実践研究を行い、それぞれが卒業後の生活において重要な力である「試みる」「楽しむ」「経験する」ことにつながるものである事を理解した。

この3つの指導形態のうち挑戦学習については生徒の実態の変化と共に内容や指導方法が変わってきているが、既に10数年来、継続的に研究がなされている。またレクリエーション学習についても過去「全校集会」「高等部朝の会」と言う形で行ってきたゲーム、エアロビクスなどの実践の積み重ねがあり、内容方法など基本的な部分では従来の指導方法を用いても効果的な指導が可能であると考えられる。

ほんもの学習に関しては、昨年、はじめて実践に取り入れたものであり、その指導方針・方法も確立しているとは言い難い。しかしながら昨年度の研究や討議を通じてほんもの学習によってはぐくまれるであろういくつかの力の重要性が確認されている。そこで今年度はほんもの学習の実際の展開・方法について研究を深めていくことにした。



ほんもの学習の1シーン

このほんもの学習の設定の経緯につい

ては既に前項で述べられているが、簡単に説明すると「余暇生活を想定した実体験重視型の学習」であり、事前学習よりもまず実際の活動場面で経験（本物の体験）に重きをおく。

そしてその指導目標として

- イ 自分にあった余暇の過ごし方を見つける
- ロ いろいろな物事に対する興味や意欲を高め自己決定する
- ハ 挑戦学習などで今まで学習してきた力を試し発揮する
- ニ 友達と助け合い認めあう
- ホ 教師が「生徒のありのままの姿」すなわち「今何が出来て、何が出来ないかを客観的にとらえる

などがあげられる。

しかし昨年度の実践の反省で「設定された内容が本当に生徒によって選択されたものか」「実践の回数が少ない」「生徒の興味が多様である」「生徒は経験したところしか行きたがらない（経験を広げようとしまない）」などの問題点が指摘された。そこで今年度はさらに

- へ 興味・関心の似た友だち同士で学年を越えたつながりを作る
 - ト 情報を自分なりに分析する
 - チ 自分の経験や印象を表現して他者に伝える
- ことも指導目標に含め、より高い教育効果が得られるようにした。

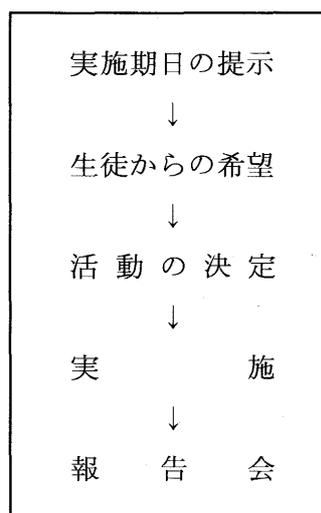
またこの学習では各学年に応じた指導目標をたてている。昨年度に関して言えば高等部1年では「家庭生活に生かせる学習活動」2年では「友だちの好きなことをみんなでやってみよう」3年では「公共施設を利用しよう」であった。

今年度は昨年の実践研究と生徒の実態をもとに次のような目標及び年間指導計画を立てた。

表Ⅳ－1 年間学習計画表

	1 学 期	2 学 期	3 学 期
A ホーム (高1)	外に出かけることにより楽しみを見いだそう		
	クラスでの集団づくりと外へ出かける ・近江町市場 ・ダイエー ・歴史博物館	自分たちで選んだ目的物を目指す ・東山俵屋 ・金沢駅百番街	興味別に分かれて出かける
B ホーム (高2)	友だちの好きなことをみんなでやってみよう		
	・県立図書館 ・ボウリング・カラオケ ・天徳院	・民族資料館 ・放送局	・県立美術館 ・映画館
C ホーム (高3)	スクラップブックをもとにして行きたいところを見つけよう		マナーを身につけよう
	・歴史博物館 ・県立美術館		・レストラン
コ ー ス 別	好きなコースを選んで行ってみよう		
	・ボウリング ・サウナ ・映画館 ・市内遊覧 ・カラオケetc		・スケート ・パットゴルフ ・映画館 ・カラオケetc

またそれぞれのほんもの学習はほぼ図Ⅳ－2のような展開で行った。



図Ⅳ－2

	月	火	水	木	金	土
1	全校集会	朝の会(中高) (鼓笛隊)	M T *1	全校集会	朝の会(高)	朝の会(高) (リズム)
2	グループ	実 習	グループ	グループ	M T *3	美 術 *4
3	グループ	実 習	体 育 *2	グループ	M T *3	美 術 *4
4	生 活 養・訓	実 習	体 育 *2	生 活 養・訓	M T *3	生 活
5	実 習	実 習	ク ラ ブ	音 楽	実 習	
6	実 習	実 習		生 活	実 習	

- *1. このMTではレクリエーション活動を主に行う。
- *2. 体育は原則として男女一緒にするが、必要に応じて分けることもある。
- *3. このMTでは挑戦学習、ほんもの学習など多様な内容を学習する。
- *4. 美術は5種目から選択して学習する。

図Ⅳ－3 時間割

今年度 ほんもの学習を実施する時間を昨年度の土曜日から金曜日に変更した（図Ⅳ-3参照）。これは昨年の実践から「土曜日が欠ける可能性が高く実践回数を確保できない」ことと「昼食を含めた1日を通しての企画が可能になる」ためである。ただこの時間は「挑戦学習」と共有の時間でありその調整が問題となった。



Yさんががんばって

また 昨年度は校内での活動が主であったクラスもあったが 今年度は社会での経験をより多く積むため 校外での活動に重きを置くことが確認された。

研究の方法としては週1回以上の学部の研究会を持ち 昨年度の実践と現在の生徒の実態をもとに今年度の実践のあり方を検討する。そして これらをもとに各学年で指導目標をたて 実践を行いこれを学部の研究会にフィードバックする。さらに実践と討議を積み重ねるなかで今年度のテーマ「豊かな心と生活」の本質に迫りたいと考えた。

この過程の中で それぞれの学年の活動内容を他の学年の生徒に対して発表することにより高等部全体がその活動を共有することを目的とした「報告会」を設定した。

これは 昨年度のAホームの生徒がBホームの活動に興味をもち意欲づけができたことから これを展開の中に組み込むことで 他の生徒たちにも新しい場所への興味を持たせることが出来るのでは と考えたためである。そしてこの会は自分の経験 思いを他者に伝えるコミュニケーションの場にもなっている。

また今年度は学年の枠を越えたコース別「ほんもの学習」の可能性が検討され実施された。



楽しかったこと ベスト1は？

詳しくは実践の項で述べるがコース別「ほんもの学習」だと自分の本当に行きたいところへ行くことが出来る。将来に続く興味・関心を同じくした者の友人関係を作るなど より卒業後の生活に生かせる学習が期待できると考えられた。

（荒木敏彦）

3. 実践

(1) Aホームの実践

「外へ出かけることにより 楽しみを見いだそう」

①生徒の実態

Aホームは男子6名 女子3名の計9名で構成されている。このうち自閉的傾向の生徒が半数おり 他の生徒を意識することが苦手である。また会話が十分にできない生徒も多く 言葉によるやりとりはあまり活発でない。しかし 校外へ出たときは 友だちを意識し理解しようとする行動も多くみられる。

日常生活においては 一人で外出し買い物などできる生徒は少ないが 外に出ることをとても好む生徒たちである。また 出来るだけ多く外出し社会とのかかわりや経験を増やしたいと考えている家庭も多い。

②今年度のほんもの学習の方針

Aホームは 一年生ということでもあり「外へ出かけることにより 楽しみを見いだそう」という年間目標で 身近であると思われる課題を取り上げて行いたいと考えた。

一学期は 他校から入学した2名の生徒も加わったので クラスでの集団づくりと外へ出かける楽しさを味わうことに主眼を置いた。

生徒個々が興味をもてることから始めようということで 市場に出かけて買い物をしたり その材料を使って自分たちで調理をする。また 大型スーパーマーケットやデパートに出かけ 電化製品のカタログ集めやゲームをすることにより 生徒それぞれが目的地で楽しめる活動と考えた。

二学期は 外に出かけて楽しさを味わうことの上に もう一步踏み込んで自分達で選んだ目的地(目的物)を目指そうということで 公共の交通機関を利用したり より多く自己選択・自己決定の場を設けることにより満足感を増すように考えた。

三学期は 季節的にも外に出での活動の機会が少なくなってくるため 大きな集団からもう少し小さな集団での活動を考え 興味別に分かれて出かけることを実践したいと考えた。

③実践

Aホームのほんもの学習は 外へ出かけることが楽しいということを前提に実践した。ここでは 一学期と二学期に活動した実践について一つずつ紹介したい。

ア 近江町市場と刺身作り

第一回目のほんもの学習は5月24日に行った。初めてのほんもの学習ということもあり 教師も生徒も少し不安があった。そこで以前にも出かけたことがあり生徒の多くが見通しをもてる近江町市場へ行くことにした。生鮮食料品を多く扱っている市場なのでそこを見学するだけではなく実際に魚を買って帰り 刺身をみんなで作ろうということになった。その活動を家庭にも知らせることにより 家での話題として取り上げてもらった。その結果 保冷箱を持ってきてくれる保護者まであり より生徒の意識 意欲を盛り上げることができた。

事前学習としては 進む方向 歩くコースに対してこだわりのある生徒もいるので それぞれが見通しをもてるように黒板を使い目印やマークなどで目的地を学習した。

またどんな魚を刺身にするのか どんな物を買えばよいのかも事前に話し合い 店の人との交渉 お金の支払いなど買い物も できるだけ教師の援助を得ず自分達で行うことにした。



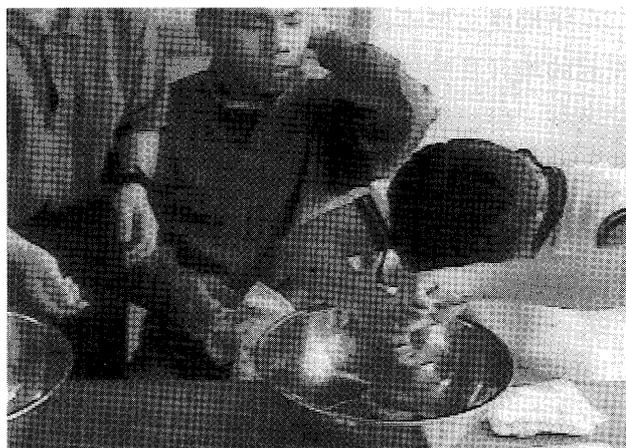
「これください」

学校の玄関を出て 歩くスピードはそれぞれ速い遅いはあったがあまり離れることなくまとまって目的地まで到着することができた。近江町市場では 買う予定になっていた魚の大きさや値段を見たりして何店かを回り一店ではイカを約10パイ もう一店ではふくらぎ（ブリ）を一本買って持ってきた保冷箱に入れて帰って来ることができた。その後は八百屋で本わさびを一本買い学校に帰ることにした。この時は 約束通り生徒達は「これください」という交渉と お金を支払うことを体験した。本来は 全員にお金の支払いなど体験してほしかったのだが 買う品数が少なく できなかったことは残念であった。

魚を買うという一つの目的が達成され もう一つの刺身を作るという目的に帰りはとても皆早足だったように思えた。

学校に着いてからは いよいよ刺身作りの体験である。しっかり手を洗い食器類の準備をして刺身作りを行った。生徒達はイカの刺身作りとわさびをおろすことを体験することになった。

まずイカの内臓を出し 皮をむくという仕事である。生ものということもありあまり時間をかけられない急いだ仕事である。今までに触ったことがなかったのかどうしても触ろうとせず嫌がる生徒 内臓がうまく出せず雑巾を絞るようにギュッと握って出そうとする生徒 皮がなかなかむけず困っている生徒 いつも食べている刺身にはなかなかたどりつか



おもわずギュッ！刺身作りです

ないことを体験した一時であった。もう一つのふくらぎの刺身作りは教師が調理することになった。生徒達は その様子を見ることになりとても興味深そうであった。何よりも生徒が一番驚いたことは 魚の頭を包丁で切り落としたときである。ビックリした顔をする生徒や「おおー」と声を出す生徒 それぞれとても印象に残ったようである。刺身を作っているという過程を見ることもほんもの学習の一つだったように思えた。この後は苦勞して作った刺身をみんなで食べた。感想は「うまい」「おいしかった」というものが多かった。言葉で表すことのできない生徒達も笑顔で食べている様子を見ると とてもおい

しかったようである。

これらの活動を振り返ってみると 自分達で買ってきて刺身を作り 食べることができたことはとても自信につながり 意欲にもつながると思える。また 生活にも広がりが見られるようになるのではないかと考えられる。

イ 金沢駅とケーキ

二学期のほんもの学習は 自分達で選んだ目的地（目的物）を目指そうという目標で 生徒達から希望をとり その中でも一番希望の多かった「電車をみる」「ケーキを食べる」ということに決まった。本来なら「電車を見る」だけでなく 乗ることができればより興味を増すのだろうが時間的な制約もあり 見学するだけにした。

「ケーキを食べる」ことは 駅の近くの商店街にケーキ屋があり容易に目的が達成されるのではないかと思い同時に行うことにした。

実施した日は9月20日で小雨の降る中を傘を持っての出発となった。

まず路線バスに乗り金沢駅まで行くことにした。バスに乗るということで生徒達にも期待感がありとても良い表情をしていた。できるだけ自分達でということで バスに乗り込むときは一人一人整理券を取り 降りるときも自分でお金の支払いをして降りることにした。降車場所が終点であるということもあり 教師には安心感があった。しかし 実際にはお金を料金箱に入れた生徒もいたが お金を入れずにしっかり手に握りしめたまま降りた生徒 傘が座席に引っかかりなかなか降りることができなかった生徒など経験の少なさを感じた。

金沢駅に着いてからは まずホームに入るために一人ずつ自分で入場券を買うことにした。入場券や乗車券を買うことは皆 初めての経験だったようである。

どうしたら入場券を買えるのか友だちの様子をじっくり見て「〇〇君上手」と声をかけてはいるが不安な生徒。お金が料金入れになかなか入らず 落として怒り出す生徒。順番を待つことが苦手でイライラしている生徒。なにも援助せず買えた生徒は一人もいなかった。この場面でも経験の少なさを感じた。そして ほんの少し援助することにより簡単に自分で買うことができた。



お金を入れて 次は？

入場券を買う段階でいろいろハプニングはあったが 割と短時間で駅のホームに入ることができた。

ホームでは ちょうど運良く大阪行きの特急「サンダーバード」と名古屋行きの特急「しらさぎ」を見ることができた。電車を見たいと言っていた生徒は「あれ乗ったことある」「わぁーすごい」と喜びの声を出していた。また電車を見たことで嬉しかったのかホームを駆け出す生徒もいた。出来れば電車に実際に乗りたかったというのが本音である。

今回のほんもの学習の目的の一つである電車を見ることが達成された後は もう一つの

目的であるケーキを食べることになった。

改札口を出て すぐそこに広がる商店街（百番街）を見て回り ケーキを食べるところを探した。持っていった予算との兼ね合いもあり なかなか適当な店が見つからなかったが ようやく一つの喫茶店に入り 生徒それぞれが 自分の好みのケーキを選び食べることができた。



どのケーキ屋にしようかな？

ケーキを食べに行きたいと希望していた生徒は「おいしい」「次は〇〇食べる」と次の目的まで楽しそうに話していた。

帰りも路線バスに乗り 帰ってくることにした。帰りは行きの時とは違いトラブルもなく無事帰ることが出来た。

外に出ることにより いろいろなことを経験し 何が出来るか 何が出来ないか生徒達の意識 成長の度合いもあらためて知ることが出来たほんもの学習であった。

経験の少なさからくる失敗もあったが 自分達で選んだ目的地（目的物）は何よりも楽しかったようである。

④まとめ

Aホームは 一人で外出して行動することが難しい生徒が多いが 外に出ることの楽しさをできるだけ多く経験することは よりよい生活を送るための必要条件になってくるのではないだろうか。そのためには できるだけ多くの具体的な活動を体験することが必要であり 大切になってくると思われる。

しかし 教師主導の活動になり 生徒は後についてくるだけの活動になってしまっただけではほんもの学習の意味が半減してしまう。できるだけ教師は援助にまわり 生徒が自分達で課題をクリアしていくことが 今後の生活を考えると必要だということを忘れてはいけない。その意味では今まで行ったほんもの学習は 少し教師が前に出すぎたかなという反省もある。

外に出ることにより 生徒達は表情も良くなり 自分のできる事 自分ではできない事など はっきり知ることができる。また自分の思いを出す場面も多くなる。今後生徒達の生活がどのような広がりを見せてくるか どのような深みを見せてくれるか興味深く楽しみである。それに生徒達に関わる多くの人たちの関わりも今後どのようなようになるだろうか。課題はたくさんあるがそれ以上に大きな期待もある。

（寺 澤 聡 鎬 木 由 美）

(2) Bホームの実践

①生徒の実態

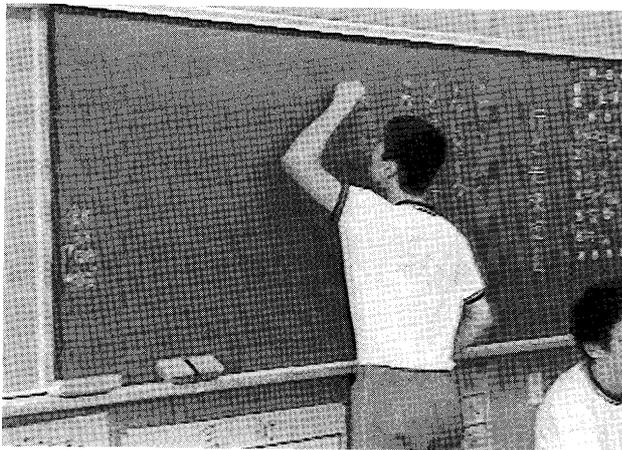
Bホームは男子5名 女子6名の計11名で構成されている。

このうち約3分の1の生徒が自閉的傾向にあり 言語によるコミュニケーションの難しい生徒もいる。しかし ほとんどの生徒は何らかの方法で自分の意思を伝えることができ 教師の指示を聞いてクラス全体で行動することができる。活動の中心となれる力をもった生徒もいるが 全般的に消極的な印象は否めない。

昨年度からはじまったほんもの学習であるが 昨年Aホーム(1年生)の際には「家庭生活で生かせる学習活動」にねらいをしぼり 1学期は「調理」の活動をとおして「自分の力で作ってみる」という経験をさせた。2学期には家族で楽しめる「カラオケ」を実践の柱に置き 家庭での余暇利用の発展を図った。3学期も同様に家庭で家族や友人たちと楽しめる「ゲーム」(百人一首他)を課題として新しい遊びを覚えられるよう設定した。それまで調理にあまり関心を示さなかった生徒が母親の手伝いをするようになったり カラオケの経験が少なかった生徒が家庭からカラオケへ行くようになったりと少しずつではあるが実践の成果が見られるようになった。

②今年度のほんもの学習のとりくみ

昨年度のBホーム(現Cホーム)では休み時間 休日の過ごし方に指導の重点を置き「カラオケ」「ボウリング」などの余暇活動を行っていた。当時Aホームだった生徒たちはBホームになってからの実践を楽しみにしていた。そこで今年度は昨年度の実践をふまつつも 生徒の自己選択・自己決定の場を確保しその決定事項を尊重していけるような学習をしていきたいと考えた。



意見を言って下さい

その結果 遊園地 ゲームセンター お好み焼きなどに多くの手が上がった。傾向としてはお金を必要とする遊び場に人気が集まったようである。

しかし これらの意見を板書し その中から活動を選択するだけで 本当に卒業後の余暇利用のための力となるか疑問がのこった。そこで「行きたい」という思いを明確にし 自分で行ける力をつけさせるため ほんもの学習の前に生徒主体の「行き先検討会」を設定することにした。これは検討会前日に行きたい場所を皆の前で発表宣言し 意思表示をした後 休み時間や帰宅後その行き先に関する交通手段 必要経費 イベント内容等を自

このため 今年度は行き先を決定する際 より多く生徒に参加させるようにした。一番最初のほんもの学習の時間 生徒全員の興味・関心を知るためにしてみたいこと 行ってみたいところを発表させた。この時テニス プラモデル サイクリング バッティングセンター 温泉 ペットショップ 中華料理など非常に個性的な意見が出た。その後友達の出した意見に同調するものに挙手させた。

分の力で調べ これを提示し他の生徒に評価・支持してもらおうといったものである。行きたいところはあるがどうやって調べたらいいかわからない生徒が多く 電話番号の調べ方 電話のかけかた ガイドブックの見方などの面で援助が必要だった。

また 今年度から設定した「報告会」のため活動終了後 生徒全員が何らかの形で感想を書き 発表する機会を設けた。こうして活動をより明確な形で経験として生徒たちの中に残せるよう留意した。

③実践

10月1日まで次の4回のほんもの学習を実施した。

第1回ほんもの学習（5月24日）「図書館へ行って本を借りよう」

コース：徒歩で県立図書館へ 貸し出しカード作成の後 館内を自由行動

最初の活動ということで行き先を特別な準備やお金がいらなところ限定した。

中央公園 金沢市立図書館 百貨店でのウィンドウショッピングなどの案がでた。

結局歩いていける距離にあった県立図書館へいくことになり発案者が電話をかけて貸し出しカードの作り方などを聞いた。このとき学生証等が必要であることを知った。



申し込み書の書き方は？

当日はまず全員が貸し出しカードを作りあとは館内自由に活動させた。

残念ながら 実際に本を借りた生徒は2名だった。そのかわり館内の各種ライブラリーではいろいろな動きが見られた。視聴覚ライブラリーでビデオを見る生徒 雑誌を見る生徒など思い思いに行動した。ここでの経験が 後に第4回の活動の際に生かされることとなった。

はじめての報告会では代表が出て 作文を朗読 写真をテレビで見せるという形で行った。

第2回ほんもの学習（6月28日）「ボウリングとカラオケをしてみよう」

コース：バスでボウリング場へ。シューズを借りてゲームの手続きをする。ゲームの後支払い カラオケへ。

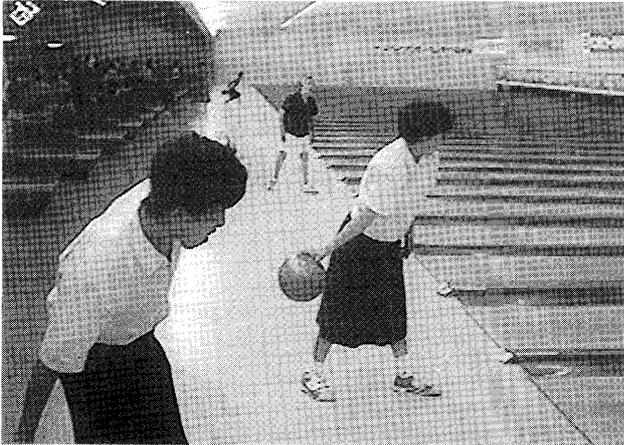
6月中旬に行われた現場実習のご苦労さん会をかねて楽しいことをしようということで特に条件を付けずに案を出させたところ カラオケ 大野弁吉からくり記念館 金沢水族館などの意見が出た。

ここでは結局討議の末ボウリング・カラオケに決定した。

雨の中バス停まで行き それぞれがバス料金を払い ボウリング場ではシューズを借り自分にあったボールを選んだ。（ここでもいくつかの助け合いの場面が見られた。）その後3つのグループに別れてゲームが始まった。教師の指導がなくても友達同士助け合い円滑

にゲームがすすんだ。ボウリングをするのははじめて もしくは慣れていない生徒も多く
ガータ・ミス連続であったがいやがる生徒はひとりもおらず 皆が声をかけ合い楽しんで
いた。

1 ゲームが終わった時点で「カラオケに行きたい」との声が生徒からあがった。そこで
「もう1ゲームするか カラオケへ行くか」をそれぞれのグループで決めるように言った。



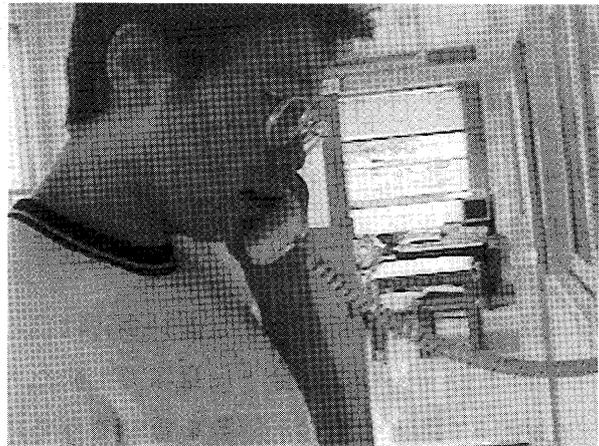
ほくもストライクだ

るところ ゲーム中など報告の担当を決めて報告文を書き発表するという形をとった。

第3回ほんもの学習（7月5日）「天徳院へ行って からくり人形を見よう」

コース：バスで天徳院へ。拝観の後 2グループに分かれて帰校

今回の検討会では前回大野記念館を却下
されたA男がその関連したものとして「天
徳院のからくり人形」を提案した。このと
き普段あまり前に出たがらないU男も自分
の行きたいところについて意見を述べて
この行き先検討会が生徒の間に浸透しつつ
あることが感じられた。結局行き先は天徳
院に決定したが 人形の上演時間など不明
の点をA男がみんなの前で改めて電話して
確認するなど新しい展開があった。



すいません 教えてください

当日天徳院では 元本校職員の方との出会いがあったり 展示物を興味深く見るなど
皆楽しむことができた。生徒の何人かにとってはよく見知った建物であったが このよう
な機会でないとして中を見ることがなかったと考えられ 既知のなかの未知を知るとい
うよい機会だったと感じられた。

帰り道 バスがなかなか来ないので誰かが「歩こう」と言い出した。今回それぞれ最低
限のお金しか持ってこさせなかったのも「バスに乗る」か「歩いて帰って途中でジュース
を買って飲む」という2つの選択をさせそれぞれ帰校した。

報告会の際にもこの2つのグループから代表者を出してそれぞれの内容を発表した。

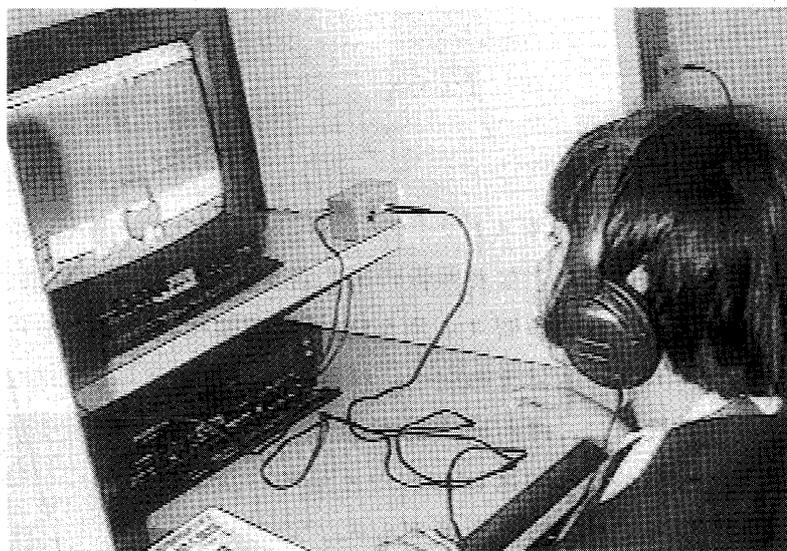
第4回ほんもの学習（9月20日）

「民俗文化財展示館とMRO（放送局）へ行って来よう」

コース：民俗文化財展示館から徒歩で放送局へ。見学の後 県立図書館へ行くグループと喫茶店に行くグループに別れそれぞれの判断で帰校。

過去3つの行き先のうちの2つがクラスのリーダー的な存在であるA男の提案したものであった。しかしここまでの活動で学習がなされたのか クラスの半数近い生徒が行きたいところについて調べたり意見を述べたりした。特にK男の「ぼくは歴史博物館に行きたいです」との宣言は非常に印象に残った。行きたいところはあるけれど見学の方法や申し込み方がわからなかったT子は 緊張のあまり泣きながらもみんなの前で電話して調べることができた。

結局U男とT子の提案が受け入れられ上記の2カ所へ行くことになったのだが MROの見学が終った後時間が余ったので それぞれの意志で喫茶店へ行く組と県立図書館に行く組に別れて行動した。図書館の中は自由行動としたのだが 第1回のほんもの学習の経験が生きており雑誌コーナー ビデオコーナー おもちゃライブラリーと自分の好きなコーナーで楽しむことができた。



このビデオ おもしろいよ

④まとめ

今年度から始めた「行き先検討会」は自らの意志で活動する 友達の見聞を聞く 社会との関わりを持つなど様々な意味で生徒たちにとって有意義であったと思う。最初はA君の独壇場であったものが回数を重ねるうちにだんだんクラス全員のものになっていったと思う。また 調べる過程において社会との関わりも増えてきたと思われる。他者の意見を認めつつ自己の思いを表現するという態度も養うことができたと考えられる。

しかしながら 自分の思いを伝えることが難しい生徒をどのように検討会に参加させていくか 実施の回数をもう少しふやせなかったか 行った先で自己選択の場面が確保されていたのか などの問題点も残った。

今回学級通信「ぎんが」を通じて活動内容や生徒の感想を紹介し 保護者の方々の理解と援助を求めた。今後 保護者も参加するほんもの学習の実施などを通じてより深い理解を訴えて行きたい。またそのことが卒業後の余暇利用に関して大きな意味があると考えられる。

（荒木敏彦 吉村裕美子）

(3) Cホームの実践

①生徒の実態

Cホームは3年生の学級であり 男子5名 女子4名で構成されている。学級全体としてみると生徒相互のかかわりや まとまりのある行動もみられるが やや活気に乏しく学習中の発言もひかえ目な生徒が多い。生徒個々については生活面で援助を要する生徒 行動面で特別にかかわりを要する生徒など多様であるが どの生徒も言葉によるコミュニケーションは可能である。また 書き言葉の点では なぞり書きや見本を見て書く段階の生徒から 生活文を綴る段階の生徒までと大きな開きがみられる。

日常会話の中では 生活年齢の高さもあって社会の出来事に関する話題がしばしばでてくることがあり とりわけスポーツに関しては情報に詳しく正確な生徒もみられる。

また 卒業学年ということもあり 行事の度に「学校生活最後」という言葉がでてくるが それだけにとどまらず「卒業してからもこんなことをしたい」という言葉もきかれ卒業後のことについての関心もたかまってきているといえる。

②今年度の「ほんもの学習」の方針

高等部の卒業学年といえは 学校生活のしめくくりと同時に実社会に出ていくことを間近にひかえての準備も必要とされる学年である。したがって ほんもの学習に取り組むにあたって「実社会」ということを念頭に置きこの学習のねらいにせまることにした。

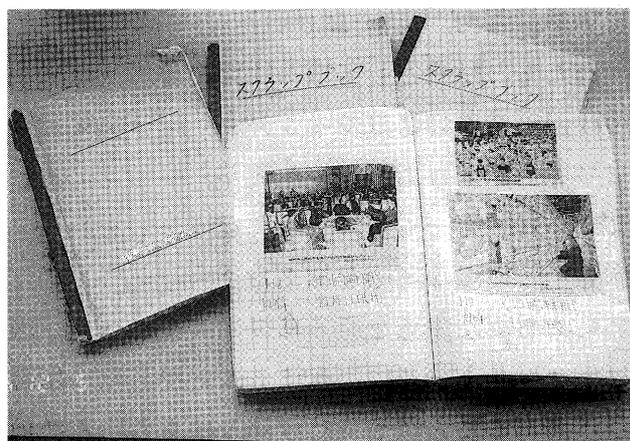
一般に実社会に眼を向けるという点では ラジオ、テレビ、新聞などマス・メディアの役割が大きいといえるがCホームではこれらの中から新聞記事に着目し スクラップブックに新聞の切り抜きを貼らせることを日課とした。各自貼ってきたスクラップブックの記事は 学級朝礼や「生活」の時間に紹介していることから ほんもの学習もこの学習活動と結びつけて取り組みをすすめることにした。

なお 社会生活上必要とされるマナーについても ほんもの学習としての取り組みを試みているが これは新聞記事からはなれ独自に計画をたてることにした。

③実践

今年度のほんもの学習については「スクラップブック」の取り組みが前提としてあることから まず このことから述べることにしたい。

スクラップブックそのものはB5版大の白紙を数十枚綴じたもので 生徒はその用紙に一日1ページずつ新聞記事を貼り 余白に新聞名 日付を書いて提出している。余白には この他に「ぼくのお



スクラップブック

じいちゃんの写真です」「私も行ったことがあります」といったコメントが書かれていることもある。これらの新聞記事は基本的には毎日の学級朝礼の時間に紹介するようにしているが その他学級の「生活」の時間にも新聞記事を題材とした学習をすすめてきている。その主な学習活動は次のとおりである。

- ア 教師が手にしたスクラップブックが誰のものであるか予想をたてる
- イ 友達がどのような記事を貼ってきたかを見る
- ウ 同じ記事がないか 漢字はどのように読むか板書を見て確かめる
- エ 心に残った記事を3つ選んで用紙に記入し投票する
- オ 開票結果を聞き感想を発表する

以上のような「生活」の時間での学習は学期に10時間程度であるが 学習活動そのものは比較的活発であるといえる。

このような学習や朝礼時における記事の紹介から これまでの記事を想起しほんもの学習での行き先を話し合いで決めることにした。話し合いの結果一学期は石川県立歴史博物館、県立美術館の2カ所に出かけたので以下にその概要を示すことにしたい。

石川県立歴史博物館

ほんもの学習での行き先を決めるための話し合いは これまでにスクラップブックに貼られた新聞記事にもとづいておこなわれた。話し合いの結果4月20日から5月26日まで石川県立歴史博物館で開催される「加賀藩の甲冑展」を見に行くことになった。

行き先が決まった後 話し合った内容にそって 保護者むけの「お知らせ」(図Ⅳ-4 形式は2回以降も同じ)の記入をK男が行った。

ほんもの学習として出かけたのは開催最終日2日前の5月24日の2～4限目である。生徒がより一層関心をもつよう新聞記事を示し簡単な説明を加えるとともに必要な注意を行った後

制服に着替え一斉に出発することにした。指導者(担任2人 級外1人)は要所要所で指導にあたることにし 行き帰りはもちろん受付 見学もふくめて生徒一人一人の行動を大切に考えた。

玄関を出てからは私語もほとんどなくひたすら目的地に向かって整然と歩いている様子であった。さすがに“自分達で”ということから緊張感が漂っていたようである。歴史博物館に到着すると早速受付を行うことになりリーダー格のK男が交渉を行っていた。受付の後 特別展示の「加賀藩の甲冑展」の展示場へ自分達で向かっていた。受付の様子を館

高等部 C ホーム

第 1 回 ほんもの学習

日 時 5月24日(金) 2～4 限
場 所 石川県立歴史博物館

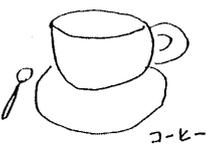
住所 金沢市出羽町
電話(0762)(2-3236)

主な活動
・歴史博物館で4月7日の北國新聞にでていたおぼろけかぶとをみる。
・見学の後きざしでかきとるなどを机からたのびくちごも。

持ち物 500円(きざしへの代金)

注意すること
てんじしてあるものをさわらない。
あるときは車に気をつける。

その他
今回は学生服で行きます。
500円をさいふに入れて家からもってきて下さい。



図Ⅳ-4 K男の書いたお知らせ



さあ 歴史博物館へ

るなかで探しだすと歓声があきおこり 口々に「まったく一緒やね」「来てよかったね」といった言葉がきかれた。社会的なことに関心のあるK子は「新聞見ているといろいろなことわかるね」と話しかけるとともに 普段はあまり皆の前ではしゃべらないN子も「時代劇にでていた」とポツリ話すなど本物を見た喜びが伝わってきた。

新聞の写真と同じ甲冑を見ることができたという喜びを共有した後は通常の展示物を見まわることにした。見学の後兼六園近くの喫茶店に向かった。飲み物の注文の後 見学先でもらったリーフレットをとり出し「次は“モダンの調べ”（次回の特別展示）が見れるね」と楽しみにしている生徒もみられた。

学校に帰ってからは歴史博物館のスタンプを押したリーフレットを見せてくれた生徒もいたことから そのことをクラスの生徒に紹介するとともに 見学した日の日付を記入することもつけ加えるなどして見学の楽しみ方についてふれた。

後日行った報告会では スクラップブックの記事を紹介した後 生徒一人ひとりが印象に残ったことや感想を中心に発表をおこなった。

石川県立美術館

石川県立美術館で「石川県日本画展」が6月20日から25日まで開催されるという記事をうけて第2回「ほんもの学習」が取り込まれることになった（話し合いやすめ方は前回とほぼ同じ）。

当日は小雨が降っていたことから傘をさして歩くことになり美術館に到着してから傘をロッカーの中に入れる方法がわからず戸惑う生徒が多く見られた。そこで 傘をロッカーの中に入れる指導を行った。

その後受付に向かったが前回受付で交渉をしたK男は「今度は僕はしない」と自分で決めていたようである。しばらくは受付の前でそれぞれが人頼みの様子であったが しばらくして責任感の強いN男が前に出て受付の交渉にあたることになった。よく聞きとれないところもあったと思われるがN男の一生懸命さが伝わったようで受付を通過することができた。展示場へ向かうとすでに受付でもらったパンフレットに目をとおしていたK男が「A君（Bホームの生徒）のお父さんの名前がでている」と話したことから 早速その作品を探すことにした。やはり知っている人の作品となると真剣さも一層増していたようである。

内の人に尋ねると「ちゃんと話していましたよ」とのこと必要な要件は話していたようである。

特別展示場では約70点の甲冑が展示してあり 受付までは緊張していたK男もその壮観さに感嘆の声を発していた。あらかじめ用意していたスクラップブックの新聞記事には写真が載っていたのでそれを示しガラスケースの中から同じものを探すことにした。あちこち見てまわ

作品を観賞した後は館内の喫茶店に入った。展示された作品の中に知っている人の作品があったことから話が弾み、さらに3回目のほんもの学習にまで話が及んだ。この話題の中でもK子は「新聞を見て考えておく」と話し、この学習に新聞が定着してきていることをうかがわせた。

報告会ではビデオを見ながらA子が説明を加え、他の生徒が感想を述べる方法をとった。肝心の館内はビデオには収められなかったが、映像があったことで説明がしやすかったようである。

④まとめ

これまで「ほんもの学習」の中にスクラップブックも組み入れて実践をおすすめ、2つの事例について述べてきた。博物館や美術館の見学は特に目新しい取り組みとはいえないが、スクラップブックの新聞記事と結びつけて見学場所を決め、どのような催物が行われているかをあらかじめ調べて見学し、失敗をしながらもできるだけ自分達の力で行動するといった過程を重視してきた。そして、実際の場合（「ほんもの」）で困難に追い込まれながらも自分達で解決する力を育てるための実践を試みてきたといえる。この点では美術館見学を行ったときのN男の受付での交渉は感動をもってうけとめている。N男は日常会話の中でも一語一語が聞きとりやすく、知らない人に対して皆を代表して話すことには相当勇気を必要としたと思われるが、そのことで全員が受付を通ることが出来たということは本人が自信をつけたということにとどまらず、まわりの生徒の励ましにもなったと思われる。

スクラップブックは一日も休むことなく続けられ、生徒は「今度はどこに出かけようか」と次のほんもの学習に思いをめぐらしているところであり、この学習スタイルも定着してきているといえる。新聞記事の内容もほとんどスポーツの写真のみを貼り続けていた生徒も、身近におこっていることにも眼を向けるなど広がりもみられるようになってきている。

今後の課題としては、新聞記事を貼ることは出来るが記事の内容をほとんど理解することが困難な生徒に対する指導について考えていかなければならない。細かな点にも配慮しながらどの生徒もいきいきと能動的に活動を行う実践を探りつづけていきたい。

(安田 茂章 山崎 晴生)

(4) コース別「ほんもの学習」の実践

①コース別「ほんもの学習」を取り上げた理由

昨年度まで「ほんもの学習」は基本的にクラス単位（本校では1学年1クラス、9～11人）で活動するものとして計画・実施してきた。しかし実践の中で「クラス単位では生徒全員の希望をかなえ、目的意識や期待感を個々に持たせることが難しいのでは？」という疑問が浮かんできた。それに対し高等部の生徒全員を趣味や興味・関心別のようなグループに分ける案が話し合われていた。また昨年度の研究協議会において他校の類似した実践例を参考にすることができた。そこで今年度から本校の「ほんもの学習」でもクラスの枠をはらい、コース別のグループを編成し活動を試みることにした。生徒一人一人がより積

極的・自主的に参加し満足感を味わうことができる活動を期待したいと考えた。

②年間計画における位置づけ

コース別「ほんもの学習」は生徒はもちろん教師にとっても初めての試みであったためクラス単位の実践を積み「ほんもの学習」のスタイルがある程度定着するであろう10月に第一回目を計画した。(73ページ 年間学習計画表参照)

またこの時期は3年生の現場実習に続き運動会など行事が立て込んでおり例年行われている「秋の遠足」をコース別「ほんもの学習」に変更することにした。

③コース別「ほんもの学習」の展開

第一回のコース別「ほんもの学習」は表Ⅳ-2のように計画し実践した。

表Ⅳ-2 第一回のコース別「ほんもの学習」計画案

主な学習内容	(授業時数)	学習集団	備 考
○コースの提示	(1)	高等部全体	・教師が10コースを提示 ・MT委員の生徒が集計 ・4コースに調整
○コースの選択	(アンケート)		
○コース別グループの発表	(1)	高等部全体	・リーダーを中心に ・保護者へのお知らせ ・個別の課題設定
○事前学習 (日程/調査/手続きなど)		コース別グループ	
○各コースの事前発表会	(1)	高等部全体	・10月9日(1日) ・保護者向け「たより」 の発行
○コース別「ほんもの学習」	(6)	コース別グループ	
○反省/報告会の準備	(2)	コース別グループ	
○報告会	(2)	高等部全体	

総授業時数16時間(事前学習に6時間 事後学習に4時間)の計画のもと第一回目のコース別「ほんもの学習」を実践した。以下表Ⅳ-2に記された学習内容を中心に述べていきたい。

○コースの提示

「自分の行きたい所 してみたいこと」を興味・関心や能力の異なる高等部の生徒全員に聞き出し それを実践に移すことは容易ではないと思われた。そこで「挑戦学習」の課題提示の方法を参考に生徒にコースの選択をさせることにした。

実際には「ほんもの学習」が行われる期日(10月9日水曜日)と クラスではなく自分の希望するコースごとにグループに分かれ出かけることをまず生徒に伝えた。クラスを超えて好きな友達や先生と出かけられるという期待からか数名の生徒から自然に拍手がわき盛り上がった雰囲気の中 コースの提示が行われた。

高等部の教師10人全員が一人1コースを生徒に提示した。イラスト入りのプラカードを掲げVTRやパンフレット その他の教材を用いた。提示したのは 以前クラス別で実施したもの 生徒の普段の生活から興味・関心が高いと思われるもの 卒業生へのアンケートの回答を参考にしたもの 教師が考えたものなどの中から 教師間で事前に話し合い決

めておいた10コースである。(表Ⅳ-3参照)

10人の教師の提示は約1時間行われたが ほとんどの生徒が最後まで楽しそうに話を聞いていた。「どのコースにしようか?」と悩みながら あるいは友達と相談しながら聞いている生徒もいた。

○コースの選択

次にコースの選択はアンケート用紙に記入する方法で行った。自分の意思を言葉で伝えるのが難しい生徒が高等部の約3分の1いることや 保護者にも今回の「ほんもの学習」の主旨を伝えるためであった。また希望するコースは二つ記入することにした。実際校外での活動をするにあたり同行する教師の配置を考えると4~5コースが妥当であり 希望以外のコースに調整される生徒ができるだけ出ないようにするためでもあった。

表Ⅳ-3 「提示されたコースと希望投票数」

○映画	(8票)	・バッチョングセンター	(4票)
○サウナ	(10票)	・近江町市場	(2票)
○百万石市内周遊バス	(10票)	・歴史博物館	(2票)
○カラオケ	(8票)	・忍者寺	(4票)
		・市立図書館	(2票)
		・パットゴルフ(晴天)	
		・ボウリング(雨天)	(6票)

*高等部全生徒29名(病欠1名)が2コースを選択

○は調整の結果 計画・実施したコース

後日昼休みに各クラスのMT委員と担当教師により集計が行われた。希望の多いものから以下の4コースにしぼり教師側で生徒をそれぞれのグループに編成した。活動内容の近い「忍者寺コース」などは「百万石市内周遊バスコース」と抱き合わせたこともあり希望にそえなかった生徒は1名だけであった。その生徒は教師との話し合いで「映画コース」を選んだ。希望するコースではなかったが 事前学習でグループのリーダーに選ばれ当日に至るまで積極的に活動に参加することができた。

○コース別グループの発表

教師からコースとグループ編成が発表される時間 生徒は大きな期待と少しの緊張が入り混じった表情を見せていた。自分の希望したコースに名前が呼ばれ嬉しそうにプラカードの前に並ぶ生徒や 同じグループになったものどうし手を取り合って喜んでいる生徒も見られた。

○事前学習

それぞれのグループに分かれリーダーとサブリーダーを1名ずつ選び まず大体の行き先や日程を決めた。バス時間や入場料などは 後日放課後や休み時間に担当教師の指導のもと リーダーやサブリーダーが中心となり電話をかけるなどして調べることにした。

リーダーやサブリーダーになった生徒が事前に与えられた用紙(図Ⅳ-5参照)の形式

をもとに所在地や電話番号 料金などを調べて記入することにした。それぞれが活動に対する期待感と責任感が大きいためか 父親に最寄りのバスの停留所を聞いてきた生徒 母親と家で市内周遊のプランを話し合ってきた生徒 新聞を見て映画の時刻を調べた生徒 放課後JRの時刻表を初めて聞き調べた生徒 電話でカラオケスタジオに予約をした生徒 さらにには事前に家族とサウナに行ってきた生徒などがいた。リーダー的な生徒にとっては能力に適した課題となったようである。

・保護者へのお知らせの作成

共通の用紙をもとにリーダーを中心にコースごとで調べたり話し合いをして記入することで事前学習を進めた。またこの生徒直筆の用紙を保護者へのお知らせにあてた。

サウナコースの場合7名のうちス

ムーズに会話ができる生徒は2名であったが 写真入りのパンフレットを十分に見せながら一人一人に教師が話しかけるなど どの生徒にもある程度イメージを膨らませ期待が持てるよう配慮した。主な日程などについては事前に家族と行ってきた生徒の話をもとにスムーズに決定した。

・個別の課題設定

「ほんもの学習」では実際の活動場面において 生徒が自己選択・自己決定する機会を大切にしている。そのために教師は「今何ができて何ができないか」「何が課題でどのような



「お屋どうしようか？」

サウナ コース											
期日	10月 9日(水) 曜日										
主な活動	・お風呂、サウナに入る ・風ごはんを食べる										
行き先	サウナサンパル										
所在地	金沢市中央3丁目										
電話番号	(0762) - *** - *****										
交通手段	北鉄バス50番										
主な日程	<table border="1"> <tr> <td>9:00</td> <td>学校発 兼六園下で50番上野屋行きにのる、新ネ申団である(210円)</td> </tr> <tr> <td>10:00</td> <td>サウナにつく(入場料無料)キャンペーン中のため お風呂、サウナに入る 自由、ゲーム、ジュースなど(1000円未満)</td> </tr> <tr> <td>12:00</td> <td>風ごはん(1000円未満) お風呂に入る</td> </tr> <tr> <td>13:30</td> <td>けんがく舎 新ネ申団でも50番兼六園下行きにのる、兼六園下である(210円)</td> </tr> <tr> <td>14:30</td> <td>学校着</td> </tr> </table>	9:00	学校発 兼六園下で50番上野屋行きにのる、新ネ申団である(210円)	10:00	サウナにつく(入場料無料)キャンペーン中のため お風呂、サウナに入る 自由、ゲーム、ジュースなど(1000円未満)	12:00	風ごはん(1000円未満) お風呂に入る	13:30	けんがく舎 新ネ申団でも50番兼六園下行きにのる、兼六園下である(210円)	14:30	学校着
9:00	学校発 兼六園下で50番上野屋行きにのる、新ネ申団である(210円)										
10:00	サウナにつく(入場料無料)キャンペーン中のため お風呂、サウナに入る 自由、ゲーム、ジュースなど(1000円未満)										
12:00	風ごはん(1000円未満) お風呂に入る										
13:30	けんがく舎 新ネ申団でも50番兼六園下行きにのる、兼六園下である(210円)										
14:30	学校着										
持ち物/さいばい	3000円										
服装/しふく、ハカマ、はながわ											
注意すること/ほかのお客さんがいるのでほかにする											
その他/下校15:00・陸上部あり											

図Ⅳ-5

な援助があればその場面をクリアできそうなのか」などの実態を一人一人の生徒について把握しておく必要がある。今回はクラスを解体しての学習集団の編成であるので 同行する担任以外の教師が生徒の実態を再確認するために 以下の項目について事前に調査し表Ⅳ-4のようにまとめた。

表Ⅳ－４ 「生徒の実態および目標」 サウナコースの場合

氏名	学年	性	お金の 支払	集団行動	公共ルールの 理解	家庭での 経験	目 標
K・T	1	男	△	△	△	あまり 無い	飲み物など好きなものを選ぶことができる 初めての場所で落ち着いて友達と行動できる
M・T	1	男	△	△	△	あまり 無い	飲み物など好きなものを選ぶことができる 友達と一緒に行動できる
S・Y	1	男	△	○	△	あまり 無い	飲み物など好きなものを選ぶことができる 初めての場所で落ち着いて友達と行動できる
U・R	1	女	△	○	△	あまり 無い	飲み物など好きなものを選ぶことができる 初めての場所で落ち着いて友達と行動できる
リーダー U・D	2	男	○	◎	◎	少し 有る	料金を一人で支払うことができる 日程と時間を意識して行動できる
S・K	2	女	○	○	△	あまり 無い	教師や他の生徒の行動を見てロッカーなどの 利用方法を知る
サブリーダー K・H	3	男	◎	◎	◎	有る	わからないことは店員に聞くことができる 日程と時間を意識して行動できる

◎できる ○大体できる △援助が必要である

○事前発表会

事前学習では日程などをひとつとおり決めさせたが 当日行ってみてどうするか考えたりどちらにするか選んだりする場面も意図的に残しておくようにした。

生徒が記入した用紙(図Ⅳ－５)を印刷して保護者宛のお知らせとした。こうすることで生徒が自分たちで計画したという実感が持てたであろうし 当日も自分たちで行動するという自覚にもつながると考えた。またこの記入した用紙をもとに 自分たちのグループがどんな計画をしたか他のグループの前で発表をした。

制服で活動する予定だったコースもあったが この発表会の後全コースとも私服で出かけようということになった。制服ではなく私服ということが 学校での学習という固さをやわらげ どこかしらお出かけ気分を盛り上げるということになった。自由な雰囲気が生徒の自発的 積極的な行動につながると期待した。また年齢的なことを考えても おしゃれしたいという気持ちを育てる機会になればと考えた。

療育手帳の利用は保護者からの提案であったが事前発表会で あるコースが持ち物の一つとして発表し他のコースでも追加することになった。療育手帳を持参し提示することで路線バスに乗る際や映画館や公共の施設の入場の際に料金が割引になる。卒業後もこの制度を利用することは望ましいと思われる。

この会は他のコースの発表を参考に自分たちの計画を再確認するよい機会となった。

○各コースの活動内容と当日の生徒の様子

各コースの当日の活動内容は表Ⅳ－５のとおりである。

表Ⅳ－５ 第一回コース別「ほんもの学習」の活動内容

コース	生徒の人数	教師の人数	行き先および主な活動	主な交通手段
サウナコース	7	3	○サウナ浴場 (入浴、○焼肉食べ放題、○ゲーム)	○市内バス (往復)
百万石市内周遊 バスコース	6	3	・歴史博物館 ・伏見寺 ○ホテルレストラン(中華ランチ) ○ゲームセンター ○忍者寺 ・町民文化館 ・近江町市場 ○デパート	○市内周遊バス (移動時)
映画館コース	8	2	・石川門 ○ハンバーガーショップ(ジュースなど) ・堅町散歩 ○映画鑑賞 ○中華料理店(ラーメンなど)	・徒歩(行き) ○市内バス(帰り)
カラオケコース	7	2	・金沢駅構内散策 ○レストラン(定食など) ○カラオケスタジオ (カラオケ、○ジュース)	○市内バス ○JR電車 (往復)

○は生徒がお金を支払う場所もしくは活動を示す

・当日の生徒の様子

サウナコースでは入場すると浴室内清掃のため約1時間待つことになった。ラウンジでテレビを見る生徒がほとんどであった。館内を下見したり雑誌を見たりする生徒もいたが予定外の自由な時間を過ごすことは多少苦痛のようにも見られた。しかし豪華な浴室でゆったり湯につかり昼食も全員で焼肉を食べ満足した表情で帰路についた。行き帰りとも教師は生徒の集団の後方を歩いた。リーダーとサブリーダーが先頭と最後尾を歩き他の生徒は二人を頼るように行動をともにしていたのが印象的であった。

市内周遊バスコースにはふだん引っ込み思案の生徒や見通しがもてないとパニックをおこす生徒がいた。当日予定外のコース変更もあったが率先して行動するリーダーにつられ終始スムーズに次の行動に移ることができた。



「さぁ食べるぞ！」焼肉食べ放題



「どっちに行けばいいのかな？」

映画館コースは徒歩での移動が多かった。クラス単位では立ち止まり教師に手を引かれることがあった生徒も当日は同行した教師を頼らず全行程をみんなと歩き通した。

カラオケコースでは事前学習で「JRに乗りたい」という生徒の希望から小松まで行くことになった。列車 レストラン スタジオ内では自由に座席を選び互いに選んだメニューや曲を教え合うなどクラスをこえた生徒どうしのかかわりあいが見られた。

○報告会

後日 高等部全員が体育館に集まり 各コースの活動を報告する時間を設定した。日記や作文を読んだりパンフレットを提示したりVTRにあわせて解説を加えるなど一人一人の生徒が自分のできる範囲で発表に参加した。その発表のスタイルもコースごとに考え発表の練習をする時間も十分にとることによりそれぞれ特徴のある楽しい報告会となった。

④まとめ

報告会の中で印象に残った一人の生徒の言葉がある。「いいでしょう 私のカラオケコース!」。マイクを持っての発表の途中にこらえ切れない笑顔と一緒にこぼれた一言であり 今回のコース別「ほんもの学習」を経験した生徒の大半の気持ちではないかと思われる。自分が行って見たかった所へ好きな仲間と行けたことで 生徒は満足感を味わうことができたのではないだろうか。

また互いに興味・関心を共有することで 仲間意識が芽生え始めたようにも思われる。運動会の準備でテント張りをコース別グループに分かれて作業しようということになったのだが 普段は集団意識があまりないように見えた生徒たちが自分のグループのテントの所にスムーズに集合していた。

自分の興味・関心にあった活動ができる期待感は生活の糧になると思われる。欠席や遅刻の多いある生徒がカラオケに行くことを目標に遅刻が少なくなった例が見られた。また3年生の男子生徒は その後も父親とサウナへ時々行っているとのこと。「卒業したら仕事をしてもらったお金で1ヵ月に一回くらい行きたい」と教師に話している。

最後にコース別「ほんもの学習」については

- ・ 選択させるコースは生徒の実態などを考慮し 実現しやすいものを提示する必要があると思われ その参考として保護者の意見を事前に調査することも必要である
- ・ クラス以外の学習集団を一時的に編成し活動にあたる際には 意識づけや生徒の実態把握のため 事前学習の時間がある程度必要である
- ・ より効果的な経験にするために クラス別「ほんもの学習」との関連性を考慮した年間計画をたてる必要がある

以上の3点が今後の課題としてあげられるが 今回の実践をとおして随所に見られた生徒たちの積極的・自主的な姿をさらに期待しこの学習を継続していきたい。

(山崎晴生)

4. まとめ

学校週5日制による月2回の休業日が定着してきた。今後ますます生徒の余暇の過ごし方や豊かな生活づくりに学校や家庭がどのようにかかわっていくのかが問われてくるだろう。

“豊かな心と生活をめざして”のテーマのもと 高等部では昨年度に引き続き“卒業後の生活にいきづくことをめざした学習活動”について 特に余暇生活づくりを念頭におき実践研究を行ってきた。

「豊かな生活とは?」「豊かな心とは?」「働くことは重要だがそれだけでいいのだろうか?」こんな疑問を話し合いながら昨年度から 本校の卒業生の生活ぶりも参考にしながら研究討議を重ねてきた。

話し合いの中には「多様な経験や好きな趣味があれば 生きがいもあり生活が楽しく充実感があるのではないか」「できる子は好きな友達と誘い合ってショッピングに行ったり映画に行ったりするのもよいだろう」「自分で好きな品物を選べる力も大切である」「だが 経験のない事柄には抵抗感があってやろうとしないだろう」といった意見があった。これらの意見をふまえ 生徒にとって将来の豊かな生活につながるきっかけづくりになればということで 昨年度から「ほんもの学習」と称して取り組んできた。

ほんもの学習を実践するにあたっては できるだけ生徒達が主体者として能動的に行動するように配慮してきた。また生徒同士が認め合い助け合うようにしてきた。また 日常の本物場面は何か起きるか分からない いわば冒険的要素が含まれた場面であるが 自分たちで問題解決していくように促してきた。教師はあくまで陰の援助者であるよう心がけた。

2年目である今年度は 2つの面で新たな取り組みを試みることにした。

ひとつめは各クラスで行ったほんもの学習について 高等部生徒全員の前で報告会をもつことにしたことである。報告会では各クラスごとに ビデオや写真やパンフレットなどを用いた報告があった。また作文や絵で感想を述べたりした。このことは自分たちが直接行った場所やおこなった活動を再確認することになっただけでなく 次回の学習に向けて見通しがつきやすくなり次回に活かすこととなった。一方 他のクラスの生徒にとっては報告会をとおして 間接的に経験でき新しい情報を得る機会となったり他のクラスの生徒のことをよく知る機会となったりしたようである。

ふたつめとしては コース別「ほんもの学習」を実施したことである。

コース別「ほんもの学習」は クラスを解体して興味関心を同じくする生徒達が集まってグループをつくり まる1日間楽しんでくる学習である。いくつかの選択肢から自分が選んだだけあって大変好評であった。この種の活動は 各自の趣味につながっていくのではないだろうかと思われる。ぜひこれからも実践を重ねていきたい。

挑戦学習では 課題提示があると 生徒自身による自己選択・自己決定が行われる場面がある。私たちはいつも感心させられるのだが その場面ではどの生徒も自分で判断しているのである。自分で納得して選択・決定したからこそ 生徒が主体的に行動するのであ

ろう。挑戦学習に限らず 様々な学習場面でこのことが確認できる。自己選択を行わせる状況を用意するならば そうした機会を通じて考える力や判断する力が育成されてくるのであろう。ほんもの学習では この方法が随所で取り入れられている。各クラスでは いろいろな場面で選択させ生徒の意志を確認している。またコース別「ほんもの学習」を実施する時にもこの方法が大変有効であった。このため 生徒達は充実感に浸り大満足していた。

とかく障害者は自分で判断する力に乏しいとか選択できないといった考え方をする人がいる。しかし 私たちは これまでの研究を通じて 生徒達がきちんと自分の気持ちや考えで判断していることを確かめている。裏を返せば 生徒自身が自分で選択できるような手掛かりのある状況づくりを教師達が工夫しているということである。

ほんもの学習を実践してきて分かったことは 当然のことではあるが 経験したことがない所では生徒たちの不安感が強く自立度が低いということだった。1年生のある生徒にとってはバス料金の支払いや券売機での切符の購入は初めてだったし3年生の多くの生徒にとっては公共施設の受付場面がそうであった。だからこそ 機会をとらえてはさまざまな場面で経験させていきたい。一方 2年生のボウリングやカラオケなど過去に何回か経験した所では時間的余裕もあってか 一人でいろいろなことができていたり友達を手助けしたりしていた。何回か経験することで 目的が分かり見通しがもてるからであろう。

これらのことから 私たちはもっともっと子どもたちを社会に出していきたい。そしていろいろな経験を積ませて自立を助けていきたいと願っている。そのためには 保護者の協力や意識の変革を期待していきたいと思っている。具体的には 時間や労力はかかるだろうが子ども本人の自立を図るよう必要最小限の援助にとどめることや友達同士で社会に出て行くことを応援するようにしてほしいことなどが挙げられる。

また 社会の人々にも この子たちのことを理解しちょっとした手助けをしてやってほしいということを伝えていきたい。自立とは何も子ども自身で全て完璧にこなすことではないと思う。周りの人達が言葉や行動で 少し支援することで 知的に障害のある子どもたちでもその子なりに社会参加していけるようになることを この学習の継続的な実践をとおして実証していきたい。

(辻 俊)

資 料

卒 業 生 へ の 質 問

平成8年8月

《卒業年度 S H 年度 性別(男 女)》

1. 現在の進路先
【事業所() 作業所() その他()】
2. 家に帰ってから主に何をしていますか？(5つ)
テレビを見ている〔23〕 CD等で音楽を聴いている〔10〕 家の手伝いをする〔10〕 本や漫画を見ている〔7〕 入浴〔7〕 ラジオを聴いている〔3〕 新聞を読む〔3〕
部屋にいる〔2〕 その他(指圧 家族との会話 ビデオ 手紙 日記 ビール 詩)
3. 休みの日は主に何をしていますか？(5つ)
買い物に行く〔15〕 テレビ・ラジオ・本読み・CD〔7〕 どこかへ出掛ける〔5〕 家の手伝い〔5〕 昼寝・休養〔5〕 ボウリング〔4〕 カラオケ〔4〕 散歩〔4〕
自転車〔2〕 その他(映画 野球 床屋 風呂 バスに乗る プール 釣り 図書館 友達の家に行く)
4. 毎日の生活の中に何か続けていること(趣味 習い事 トレーニング等)はありますか？
特になし〔7〕 トレーニング〔7(ジョギング 体操 縄跳び ヨガ)〕
ピアノ・ドラム〔3〕 手伝い〔3〕 水泳〔2〕
その他(ニュースを見る ボウリング 剣舞)
5. 何をしている時が一番楽しいですか？
仕事をしている時〔4〕 職場の人としゃべっている時〔3〕 職場の行事に参加した時〔3〕
音楽を聴いている時〔3〕 友達と電話している時〔2〕
食べたり飲んだりしている時〔2〕 その他(兼友親子の集い あすなろ学級 ゲーム 家族との会話 ピアノ)
6. 友達といっしょに遊んだり待ち合わせをしたりすることがありますか？
時々電話する〔3〕 カラオケ〔1〕 家に来る〔1〕 親も一緒に〔1〕 特になし〔18〕
7. 何かしてみたいことはありますか？(その理由も含めて)
8. どこか行きたい所はありますか？(その理由も含めて)
(設問7. 8の回答をまとめて)
旅行〔16(温泉 ハワイ 東京 日本一周)〕 家族と外出〔6(デパート 焼き肉屋など)〕
カラオケ〔4〕 デート〔2〕 その他(ゲームセンター プール 本屋) 特になし〔10〕
【したいこと 料理 レストランのスタンプ集め 休養 楽しい結婚生活 やせるための運動】
9. 学校の勉強で思い出に残っているものは何ですか？
グループ学習〔9〕 MT〔8〕 学校行事〔7〕 音楽・体育等の学習〔5〕 実習〔2〕
クラブ〔2〕 読み聞かせ〔2〕 その他(鼓笛隊 陸上部 日記 先生との会話)

〔 〕内は回答数
24名より回答